

玄齋詩跋

林宏作

跋唐太宗守歲

稍遜風騷誰信之、通篇輕妙語生癡。
堂皇清潤初唐少、一代英豪百世師。

跋杜審言和晉陵陸丞早春遊望

物候獨驚天外客、更聞古調動歸思。
傷春懷抱還傷世、黃鳥聲中泪下時。

跋宋之問新年作

胸襟直敘寄幽懷、貶竄自傷怨誹偕。
太傅長沙同鬱悒、鄉心新歲悵天涯。

跋沈佺期古意

昔日雙棲不識愁、爾今書斷怨難收。
相思欲寄從何寄、漫漫淒涼夜正秋。

跋蘇頲汾上驚秋

漢皇昔日賦秋風、少壯繁華轉瞬空。
萬里河汾心緒亂、那堪搖落古今同。

跋孟浩然張七及辛大見尋

南亭醉作

平生唯愛酒、癖好與君同。
遙恨千年後、無緣侍醉翁。

跋李白清平調二首

其一

賞花對妃自旖旎、興到筆隨韻更奇。
想見翰林神奕奕、金華牋上醉吟詩。

其二

笑領歌詩酒滿杯、楊肥得意欲天回。
調高聲響詞微婉、神遠情遙弦外來。

其三

豎人一語讒飛燕、落拓謫仙雨露摧。
可歎君王無識見、清平絕妙誤奇才。

跋李白春夜洛城聞笛

暗飛折柳為誰調、春夜鄉愁夢欲遙。
散逸丰神清韻遠、八荒揮斥躋雲霄。

跋高適送李少府貶峽中

王少府貶長沙

切時切地嚴章法、含意運辭見匠心。
巫峽衡陽無怨懟、帝鄉未遠待君吟。

跋劉長卿碧澗別墅喜皇甫

侍郎相訪

灑氣催詩魄、停雲興未闌。
猶思憐舊雨、橋斷不辭難。

跋杜甫陪諸貴公子丈八溝攜妓

納涼、晚際遇雨二首其一

頸聯雖質風情好、老杜閒中氣亦狂。
詩被雨催人不及、豪歌坦蕩晚來涼。

跋杜甫登樓

感時撫事物情乖、北極闇幽道未諧。
梁父聊吟嗟不用、錦江春色倍傷懷。

跋杜甫曲江對酒

老健自然清又淡、雄奇筆力睥群豪。
七州高揖了無意、縱酒悲歌諫爾曹。

跋杜甫登高

艱難歲月又逢秋、景色蕭條客意愁。
感時傷遇還多病、惆悵江天更誰酬。

跋杜甫夜

句法整嚴意境遙、筆端清拔自高標。

每依北斗懷京洛、秋夜旅魂入九霄。

跋劉方平春怨

一日之愁黃昏最、一年之怨春暮多。
閉門忍見梨花落、寂寂無人恩愛窮。

跋白居易初冬早起寄夢得

詩成雖率易、衷腑寄知音。
殘夢書不盡、蘇州識我心。

跋白居易草

春草芊綿致遠思、別情離意寸心知。
東風一夜還惆悵、又送王孫翠綠時。

跋柳宗元梅雨

念帝鄉兮傷放逐、衣生層黻共蒼茫。
江雲海霧情難盡、時雨紛飛夢又長。

跋僧無可冬日寄清龍寺源公

頷聯警拔勝千言、通體圓融清淨門。
詩寄源公招我宿、更尋禪悟信乾坤。

跋元稹早春尋李校書

推窗看柳嗅梅香、蕩漾東風綠水泱。
寓目賞心何處是、為君撩亂覓春芳。

跋杜牧寄揚州韓綽判官

同是青樓客、揚州舊已諳。
吹簫橋在否、存問寄江南。

跋李商隱夜雨寄北

浙瀝巴山夜雨時、江湖滿地報君知。
歸來却話淒涼景、共剪燈花寄妙詞。

跋趙嘏長安晚秋

倚樓趙氏古今傳、情韻纖長萬象牽。
故國迢迢秋欲晚、鱸魚正美悵無邊。

跋司空圖早春

自誇得意五言最、讀罷欣然齒頰香。
骨韻清新哀玉響、苦吟有悟即仙鄉。

跋寇準冬夜旅思

詩似晚唐意不同、深沈悲壯逐狂風。
澶州一幸遼兵降、萊國功高時命窮。

跋丁謂途中盛暑

此際南遷盛暑天、渴思困憶杳無緣。
詩才終負智謀誤、談笑退閒又幾年。

跋王安石次韻朱昌叔歲暮

故作奇言老更豪、未傷正雅韻尤高。
淒然又是歲殘日、檢點生平萬籟號。

跋王安石半山春晚即事

淡靜恬安韻味長、塵紛脫盡醉春光。

半山幽絕人間遠、惟有鳥歌伴詩腸。

跋程顥郊行即事

太深太鑿不成詩、明道此言是我師。
春入遙山遊衍去、浴沂尼父亦相期。

跋王安國繚垣

規格整齊議論真、交融情景悟風塵。
心期歡伯快然諾、同醉夢鄉即是春。

跋蘇軾正月二十日往岐亭、郡人

潘古郭三人送余於女王城東禪莊院

一氣呵成才力健、雄渾俊逸律難繩。
關山魂斷黃州日、流水行雲筆更騰。

跋蘇軾出潁口初見淮山

是日至壽州

骨力清而健、渾成氣勢張。

詩情隨筆至、吳體又何妨。

跋陳師道除夜對酒贈少章

斐然高唱妙吟思、神力充盈意象奇。
我亦東西淪落客、低徊暗誦夜遲遲。

跋陳師道十月

韻律幽閒格調高、無非無是靜風濤。
柴扉一閉三冬過、衣敝腸飢詩愈豪。

跋陳師道夏日即事

歡娛花絮對、本自杜陵來。
魂夢渺無極、窮愁絕唱哀。

跋張耒臘日晚步三首其二

新警有風致、通春絕妙詞。
欣然歌草柳、疇隴計多時。

跋張耒夏日

意趣幽閑語亦雅、直排四景筆生花。
清杯對竹銷長夏、塵俗渾忘萬物嘉。

跋呂本中柳州開元寺夏雨

流動詩多活、頸聯深至哉。

湖湘秦蜀意、老杜致三哀。

跋曾幾仲夏細雨

愜字千錘始得來、結歸細意費敲推。
生花妙筆深堪賞、更勝芭蕉報雨催。

跋陳與義除夜

氣機生動閒中淡、語老韻深意自狂。
明日春生風色好、岳陽樓上望家鄉。

跋鄭剛中寒意

意韻幽而淡、愁腸淚暗彈。
遙知歸日未、風勁嘆衣單。

跋陸游五月初作

領聯小巧貪求對、可歎放翁力未該。
棋局酒甌堪永夏、勸君多取莫相猜。

跋陸游夏夜不寐有賦

夏夜難眠非怯暑、丈夫功業略無成。
闌干拍遍愁何極、北望山河滿羯塵。

跋徐照和翁靈舒冬日書事三首

韻味瀾茫耳目前、瘦寒又復有誰憐。
千愁萬慮等閒事、酒裏翩翩物外遷。

跋宋自遜一室

格力殊深意趣豪、三冬寒凍自潛逃。
愁城一破餘何事、天地逍遙萬里翱。

跋趙與東次韻方萬里雨夜雪意

勢均力敵意殊佳、氣韻甜酣情亦偕。

雨夜穴窗疑欲雪、童心可愛樂生涯。

跋真山民詩集

功名齊蟻蛭、萬物自澄鮮。
不賦千鍾賦、人間分外妍。

讀錯公師千夢堂詩集

神游冥漠貴虛清、澹泊平生自有情。
至樂相忘唯餘夢、疏狂磊落泛舟行。

讀選堂詩詞集

用佛國集孟買苦熱韻

四疊寄固翁香江

其一

尋幽覽勝枕清流、遙想先生萬里遊。
四海五洲無遠近、詩情畫意入心頭。

其二

湖光水色等閒流、唯待詩翁筆底遊。
硬語盤空風骨秀、洗滌惱白少年頭。

其三

語妙韻奇睨衆流、韓蘇李杜許同遊。
憂思和阮長洲日、百代遐心天盡頭。

其四

白山湖黑海東流、羈旅南征憶舊遊。
久客天涯心悟道、晨曦更上萬峯頭。

跋陸游沈園漢俳二首

其一

小園依舊在、題壁漠漠事茫茫、斷
雲幽夢長。

其二

不堪回首望、往事傷心迹已陳、夢
斷四十春。

浪淘沙二首

讀錯公師滿江紅

其一

昨夜夢魂中、故國迷濛、傷心淒切有誰同。
天上人間多少恨、龍馬無蹤。快事最難逢、
髮白何功、山林鐘鼎已成空、但看江帆斜影沒、
老了英雄。

其二

我愛古人風、相遇書中、何須妄念後人同。
燈滅五更鷄又泣、樂趣無窮。勝境好研攻、
他事皆空、誰言休讀得天功、學海書城勤奮進、
成就英雄。

原作及其訓讀

(全集及錯公師滿江紅茲請從略)

唐太宗(李世民)『守歲』

暮景斜芳殿、年華麗綺宮。寒辭去冬雪、暖帶入春風。階馥舒梅素、盤花卷燭紅。共歡新故歲、送迎一宵中。

暮景 芳殿を斜めにし、年華(つきひ) 綺宮に麗わし。寒は去冬の雪に辭し、暖は入春の風を帶ぶ。階馥(かんば)しきは梅素を舒ぶ、盤花は燭紅を卷く。共に新故の歳を歡び、迎送す一宵の中。

杜審言『和晉陵陸丞早春遊望』

獨有宦遊人、偏驚物候新。雲霞出海曙、梅柳度江春。淑氣催黃鳥、晴光轉綠蘋。忽聞歌古調、歸思欲沾巾。

獨(ひと)り宦遊(かんじゆう)の人(ひと)有(あ)り、偏(ひと)えに驚(おど)く 物候(ぶつこう)の新(あら)たなるに。雲霞 海を出(い)でて曙(あ)け、梅柳 江(か)を度(わた)つて春(はる)なり。淑氣(しゆくき) 黃鳥(わうきう)を催(もよほ)し、晴光(せいかう) 綠蘋(りよくひん)に轉(てん)ず。忽(たちま)ち古調(こてう)を歌(う)を聞(き)き、歸思(きし) 巾(きん)を沾(つゐ)さんと欲(ほ)す。

宋之問『新年作』

郷心新歲切、天畔獨漚然。老至居人下、春歸在客先。嶺猿同旦暮、江柳共風煙。已似長沙傅、從今又幾年。

郷心 新歲に切なり、天畔獨り漚然たり。老至つて人の下に居り、春歸つて客の先に在り。嶺猿 旦暮を同じうし、江柳 風煙を共にす。已に長沙の傅（賈誼）に似たり、今從り又た幾年の年ぞ。

沈佺期『古意』

盧家少婦鬱金堂、海燕雙棲玳瑁梁。九月寒砧催木葉、十年征戍憶遼陽。白狼河北音書斷、丹鳳城南秋夜長。誰為含愁獨不見、更教明月照流黃。

盧家の少婦 鬱金堂、海燕雙棲す 玳瑁の梁。九月 寒砧 木葉を催し、十年 征戍 遼陽を憶う。白狼河の北 音書斷之、丹鳳城の南 秋夜長し。誰が為めにか愁いを含む 獨不見、更に明月をし

て流黄を照らさ教む。

蘇頲『汾上驚秋』

北風吹白雲、萬里渡河汾。心緒逢搖落、秋聲不可聞。

北風 白雲を吹き、萬里 河汾を渡る。心緒 搖落到に逢い、秋聲 聞く可からず。

孟浩然『張七及辛大見尋、南亭醉作』

山公能飲酒、居士好彈箏。世外交初得、林中契已并。納涼風颯至、逃暑日將傾。便就南亭裏、餘尊惜解醒。

山公能く酒を飲み、居士好んで箏を弾く。世外 交初めて得、林中 契已に并す。納涼 風 颯として至り、逃暑 日 將に傾かんとす。便ち南亭裏に就いて、餘尊 解醒を惜む。

李白『清平調』三首

其一

雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃。若非群玉山頭見、會向瑤臺月

下逢。

雲には衣裳を想い、花には容を想う、春風 檻を拂うて露華濃か
なり。若し群玉山頭に見るに非ずんば、會ず瑤臺に向つて逢わん。

其二

一枝濃艷露凝香、雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚
新粧。

一枝の濃艷 露 香りを凝らす、雲雨巫山 枉しく斷腸。借問す
漢宮 誰か似るを得たる、可憐の飛燕 新粧に倚る。

其三

名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看。解釋春風無限恨、沈香亭北倚
闌干。

名花 傾國 兩つながら相い歡ぶ、長く君王の笑いを帯びて看
を得たり。春風無限の恨みを解釋して、沈香亭北 闌干に倚る。

李白『春夜洛城聞笛』

誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城。此夜曲中聞折柳、何人不起故園情。

誰が家の玉笛ぞ 暗に聲を飛ばす、散じて春風に入り 洛城に満つ。此の夜 曲中に折柳を聞く、何人か起こさざらん故園の情。

高適『送李少府貶峽中、王少府貶長沙』

嗟君此別意何如、駐馬銜杯問謫居。巫峽啼猿數行淚、衡陽歸雁幾封書。青楓江上秋天遠、白帝城邊古木疎。聖代即今多雨露、暫時分手莫躊躇。

嗟君 此の別れ 意何如、馬を駐め杯を銜んで 謫居を問う。
巫峽の啼猿 數行の涙、衡陽の歸雁 幾封の書。青楓江上 秋天遠く、白帝城邊 古木疎なり。聖代 即今 雨露多し、暫時 手を分かたん 躊躇する莫かれ。

劉長卿『碧澗別墅喜皇甫侍郎相訪』

荒邨帶返照、落葉亂紛紛。古路無行客、寒山獨見君。野橋經雨斷、
澗水向田分。不為憐同病、何人到白雲。

荒邨 返照を帯び、落葉亂れて紛紛。古路 行客無く、寒山 獨
り君を看る。野橋 雨を経て断れ、澗水 田に向つて分る。同病を
憐れむが為にあらずんば、何人か白雲に到らん。

杜甫『陪諸貴公子丈八溝攜妓納涼、晚際遇雨二首』其一

落日放船好、輕風生浪遲。竹深留客處、荷淨納涼時。公子調冰水、
佳人雪藕絲。片雲頭上黑、應是雨催詩。

落日 放船好しく、輕風 浪を生ずること遅し。竹は深し客を留
むる處、荷は淨し納涼の時。公子 冰水を調え、佳人 藕絲を雪う。
片雲 頭上に黒し、應に是れ雨の詩を催すなるべし。

杜甫『登樓』

花近高樓傷客心、萬方多難此登臨。錦江春色來天地、玉壘浮雲變

古今。北極朝廷終不改、西山寇盜莫相侵。可憐後主還祠廟、日暮聊為梁父吟。

花 高樓に近うして客心を傷ましむ、萬方多難 此に登臨す。錦江の春色 天地に來り、玉壘の浮雲 古今に變ず。北極の朝廷 終に改まらず、西山の寇盜 相い侵す莫かれ。憐む可し 後主（劉禪）も還た廟に祠らる、日暮 聊か梁父の吟を為す。

杜甫『曲江對酒』

苑外江頭坐不歸、水精春殿轉霏微。桃花細逐楊花落、黃鳥時兼白鳥飛。縱飲久判人共棄、懶朝眞與世相違。吏情更覺滄洲遠、老大悲傷未拂衣。

苑外の江頭 坐して歸らず、水精の春殿 轉た霏微。桃花 細かに楊花を逐うて落ち、黃鳥 時に白鳥を兼ねて飛ぶ。飲を縱しいままにして久しく人の共に棄つるに判せ、朝するに懶なるは眞に世と相違う。吏情 更に覺ゆ滄洲の遠きを、老大 悲傷して未だ衣を

拂はらわず。

杜甫『登高』

風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛廻。無邊落木蕭蕭下、不盡長江滾滾來。萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺。艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新停濁酒杯。

風は急に天は高くして猿ざるの嘯なくこと哀かなし、渚なみは清く沙は白くして鳥は飛び廻めぐる。無辺の落木は蕭蕭として下おち、不盡の長江は滾滾こんこんとして來る。萬里 悲秋 常に客と作り、百年 多病 獨ひとり台に登る。艱難に苦はなだ恨うらむ 繁霜の鬢びん、潦倒ろうとうし新あらたに停とどむ 濁酒の杯。

杜甫『夜』

露下天高秋氣清、空山獨夜旅魂驚。疎燈自照孤帆宿、新月猶懸雙杵鳴。南菊再逢人臥病、北書不至雁無情。步簷倚杖看牛斗、銀漢遙應接鳳城。

露下ち天高くして秋の氣は清く、空しき山に獨りいる夜は旅の魂の驚く。疎しき燈は自ら照らして孤つの帆の宿り、新月は猶お懸かりて雙つの杵の鳴る。南の菊に再び逢いつつ人は病に臥し、北の書は至かずして雁の情無し。簷に歩み杖に倚りて牛斗のほしを看る、銀の漢は遙かに應に鳳城に接なるべし。

劉方平『春怨』

紗窗日落漸黃昏、金屋無人見淚痕。寂寞空庭春欲晚、梨花滿地不開門。

紗窗 日落ちて 漸く黃昏、金屋 人無く 淚痕を見る。寂寞たる空庭 春晚れんと欲す、梨花 地に滿つ 門を開かず。

白居易『初冬早起寄夢得』

起戴烏紗帽、行披白布裘。爐温先暖酒、手冷未梳頭。早起烟霜白、初寒烏雀愁。詩成遣誰和、還是寄蘇州。

起きて烏紗帽を戴き、行きて白布の裘を披る。爐温ければ先ず酒

を暖め、手冷ゆるも未だ頭を梳けらず。早起 烟霜白く、初寒 烏
雀愁う。詩成りて誰をして和せしむる、還た是れ蘇州に寄せん。

白居易『草』

離離原上草、一歳一枯榮。野火燒不盡、春風吹又生。遠芳侵古道、
晴翠接荒城。又送王孫去、萋萋滿別情。

離離たる原上の草、一歳に一たび枯榮す。野火 焼けども盡きず、
春風 吹きて又た生ず。遠芳 古道を侵し、晴翠 荒城に接す。
又た王孫の去るを送り、萋萋として別情滿つ。

柳宗元『梅雨』

梅實迎時雨、蒼茫值晚春。愁深楚猿夜、夢斷越鷄晨。海霧連南極、
江雲暗北津。素衣今盡化、非為帝京塵。

梅實 時雨を迎え、蒼茫 晩春に値う。愁い深し 楚猿の夜、夢
断ちて越鷄の晨。海霧 南極に連り、江雲 北津に暗し。素衣 今

盡く化して、帝京の塵と為らず。

僧無可『冬日寄清龍寺源公』

斂屨入寒竹、安禪過漏聲。高杉殘子落、深井凍痕生。罷磬風枝動、懸燈雪屋明。何當招我宿、乘月上方行。

屨を斂めて寒竹に入り、安禪 漏聲を過ぐ。高杉 殘子落ち、深井 凍痕生ず。磬を罷めて風枝動き、燈を懸げて雪屋明らかなり。何か當に我を招いて宿せしめ、月に乗じて上方に行くべき。

元稹『早春尋李校書』

款款春風澹澹雲、柳枝低作翠龍裙。梅含鷄舌兼紅氣、江弄瓊花散綠紋。帶霧山鶯啼尚少、穿沙蘆筍葉纔分。今朝何事偏相覓、撩亂芳情最是君。

款款たる春風 澹澹たる雲、柳枝 低れて翠龍裙と作る。梅は鷄舌を含みて紅氣を兼ね、江は瓊花を弄びて綠紋を散ず。霧を帯びて 山鶯 啼くこと尚お少なく、沙を穿ちて 蘆筍 葉 纔かに分か

る。今朝 何事かありて偏ひとえに相あい覓もとむるや、撩り亂らんたる芳情 最も
是これ君なり。

杜牧『寄揚州韓綽判官』

青山隱隱水迢迢、秋盡江南草未凋。二十四橋明月夜、玉人何處教
吹簫。

青山隱隱 水迢迢、秋盡きて江南 草未だ凋めず。二十四橋 明
月の夜、玉人何れの處か吹簫を教うる。

李商隱『夜雨寄北』

君問歸期未有期、巴山夜雨漲秋池。何當共翦西窗燭、却話巴山夜
雨時。

君は歸期を問うも 未だ期有らず、巴山の夜雨 秋池に漲る。何
か當に共に西窗の燭を翦り、却って話さん 巴山夜雨の時。

趙嘏『長安晚秋』

雲物淒涼拂曙流、漢家宮闕動高秋。殘星數點雁橫塞、長笛一聲人倚樓。紫艷半開籬菊淨、紅衣落盡渚蓮愁。鱸魚正美不歸去、空戴南冠學楚囚。

雲物 淒涼として曙を拂って流る、漢家の宮闕 高秋動く。殘星數點 雁 塞を横ぎり、長笛一聲 人 樓に倚る。紫艷 半ば開いて 籬菊淨く、紅衣 落ち盡して 渚蓮愁う。鱸魚 正に美なれども 歸り去らず、空しく南冠を戴いて楚囚を學ぶ。

寇準『冬夜旅思』

年少嗟羈旅、煙霄進未能。江樓千里月、雪屋一龕燈。遠信憑邊雁、孤吟寄岳僧。爐灰愁擁坐、硯水半成冰。

年少 羈旅嗟き、煙霄進めども未だ能わず。江樓 千里の月、雪屋 一龕の燈。遠信 辺雁に憑り、孤吟するも 岳僧に寄す。爐灰 愁にして坐を擁し、硯水 半ば氷と成る。

丁謂『途中盛暑』

山木無陰驛路長、海風吹熱透蕉裳。渴思西漢金莖露、困憶南朝石步廊。江上綸竿輸散誕、林間冠褐負清涼。下程欲選披襟處、滿眼蘋桐與佛桑。

山木 陰無く 驛路長し、海風 熱を吹いて蕉裳に透る。渴しては西漢の金莖露を思い、困しんては南朝の石步廊を憶う。江上の綸竿 散誕を輸し、林間の冠褐 清涼を負う。下程 襟を披く處を選ばんと欲すれば、滿眼 蘋桐と佛桑。

王安石『次韻朱昌叔歲暮』

城雲漏日晚、樹凍裏春深。慘密魚難暖、巢危鶴更陰。橫風高曠弩、殘溜細鳴琴。歲換兒童喜、還傷老大心。

城雲 漏日晚れ、樹は凍りて春を裏んで深し。慘 密にして魚暖くなり難し、巢 危くして鶴更に陰なり。橫風 高く弩を曠り、殘溜 細く琴を鳴らす。歲換わるは兒童喜ぶも、還た老大の心を傷ま

しむ。

王安石『半山春晚即事』

春風取花去、酬我以清陰。翳翳陂路靜、交交園屋深。牀敷每小息、杖屨亦幽尋。惟有北山鳥、經過遺好音。

春風 花を取り去り、我に酬ゆるに清陰を似つてす。翳翳 陂路
靜かに、交交 園屋深し。牀敷 毎に小息し、杖屨 亦た幽尋す。
惟だ北山の鳥の、經過して好音を遺す有り。

程顥『郊行即事』

芳原綠野恣行時、春入遙山碧四圍。興逐亂紅穿柳巷、困臨流水坐
苔磯。莫辭盞酒十分醉、祇恐風花一片飛。況是清明好天氣、不妨遊
衍暮忘歸。

芳原 綠野 恣ほしに行まく時、春は遙山に入いって四圍碧みどりなり。興すれ
ば亂紅を逐おうて柳巷うがを穿つち、困つるれば流水ながりに臨まんで苔磯たいきに坐ます。辭
する莫なし 盞酒 十分じふぶんに醉まうを、祇ただ恐おそる 風花 一片ひとひら飛とぶを。況いわ

んや是れ清明の好天氣、妨げず 遊衍して暮歸ることを忘るるを。

王安國『繚垣』

繚垣烏鵲近人飛、簾外瞳瞳日上遲。檜作寒聲風過夜、梅含春意雪殘時。古今無物為眞樂、出處何心更詭隨。寄語年華聊一笑、未應長負醉鄉期。

繚垣の烏鵲 人に近づきて飛び、簾外 瞳瞳として日上ること遅し。檜 寒聲を作して風過ぐる夜、梅 春意を含んで雪残る時。古今 物 眞樂を為すこと無し、出處 何ぞ心更に詭隨せんや。語を年華に寄せて聊か一笑し、未だ應に長く醉郷の期に負かんや。

蘇軾『正月二十日往岐亭、郡人潘古郭三人送余於女王城東禪莊院』

十日春寒不出門、不知江柳已搖村。稍聞泱泱流冰谷、盡放青青沒燒痕。數畝荒園留我住、半瓶濁酒待君温。去年今日關山路、細雨梅花正斷魂。

十日の春寒に門を出でず、知らざりき 江柳の已に村に揺らがんとは。稍聞く 決決として氷谷に流るるを、盡く青青たるを放て焼痕を没せしめぬ。數畝の荒園は我を留めて住せしめ、半瓶の濁酒は君を待つて温む。去年の今日 関山の路、細雨 梅花 正に魂を断てり。

蘇軾『出穎口初見淮山、是日至壽州』

我行日夜向江海、楓葉蘆花秋興長。平淮忽迷天遠近、青山久與船低昂。壽州已見白石塔、短棹未轉黃茅岡。波平風軟望不到、故人久立煙蒼茫。

我が行 日夜 江海に向う、楓葉 蘆花 秋興長し。平淮 忽ち天の遠近に迷い、青山 久しく船と低昂す。壽州 已に白石塔を見れども、短棹は未だ黃茅岡を轉ぜず。波平らかにして風は軟らかにして 望めども到らず、故人 久しく煙の蒼茫たるに立つ。

陳師道『除夜對酒贈少章』

歲晚身何托、燈前客未空。半生憂患裏、一夢有無中。髮短愁催白、
顏衰酒借紅。我歌君起舞、潦倒略相同。

歲晚身 何にか托せん、燈前 客未だ空しからず。半生 憂患
の裏、一夢 有無の中。髮短く愁は白きを催し、顔衰えて酒に紅を
借る。我れ歌えば 君起ちて舞い、潦倒 略ぼ相い同じくせん。

陳師道『十月』

十月天公作許悲、負霜鴻雁不停飛。莽連萬里雲山去、紅盡千林秋
徑歸。病夫搜句了節序、小齋焚香無是非。睡過三冬莫開戸、北風不
貸芰荷衣。

十月の天公 許悲しみを作し、霜を負う鴻雁 飛ぶを停めず。莽
萬里に連なりて雲山去り、紅 千林に盡きて秋徑歸る。病夫 句を
搜して節序了り、小齋 香を焚きて是非なる無し。睡り三冬を過ぎ
るも戸を開けること莫し、北風 芰荷に衣を貸さず。

陳師道『夏日即事』

花絮隨風盡、歡娛過眼空。窮多詩有債、愁極酒無功。家在斜陽下、人歸滿月中。肝腸渾欲破、魂夢更無窮。

花絮かじよ 風にかぜ 随したが っつて盡つき、歡娛 眼に過ぎて空し。窮多おほくして詩債有り、愁極きわまりて酒 功無し。家は斜陽の下もとに在り、人歸ること 滿月の中。肝腸渾すべて破れんと欲し、魂夢更さらに窮きわり無し。

張耒『臘日晚步三首』其三

喜覺陽和近、山園策杖行。草應知地暖、柳欲向人輕。殘雪通春信、鳴禽報曉晴。田閭未成計、搔首問春耕。

喜びて陽和の近おほきを覺おぼえ、山園 杖を策して行く。草 應まさに地の暖ぬきを知り、柳 人に向むかって輕かろきを欲ほす。殘雪 春信に通じ、鳴禽 曉晴を報つげず。田閭 未いまだ計な成ならず、首かを搔かきて春耕を問とう。

張耒『夏日』

蚓壤排晴圃、蝸涎印雨堦。花鬢嬌帶粉、樹角老封苔。問字病多忘、
過隣慵却回。晚涼還盥櫛、對竹引清杯。

蚓壤いんじょうは晴圃かえんを排し、蝸涎かえん雨堦かえんに印す。花鬢は嬌として粉を帶び、
樹角は老いて苔を封ず。字を問うも病みて忘ること多し、隣を過よ
ぎるも慵もろくして却回す。晚涼還また盥櫛かんしつ、竹に對して清杯を引く。

呂本中『柳州開元寺夏雨』

風雨翛翛似晚秋、鴉歸門掩伴僧幽。雲深不見千巖秀、水漲初聞萬
壑流。鐘喚夢回空悵望、人傳書至意沉浮。面如田字非吾相、莫羨班
超封列侯。

風雨翛翛しゅうしゅうとして晚秋に似、鴉かえ歸り門掩とじて僧を伴い幽なり。雲深
くして千巖の秀を見ず、水漲あふれて初めて萬壑の流れを聞く。鐘 夢
の回るを喚よびて空しく悵望、人 書の至るを傳えるも竟つひに沉浮。面
田字の如くも吾が相あらに非あらず、班超の列侯に封ずるを羨む莫なれ。

曾幾『仲夏細雨』

霽霽無人見、芭蕉報客聞。潤能添硯滴、細欲亂爐薰。竹樹驚秋半、
衾裯愜夜分。何當一傾倒、趁取未歸雲。

霽霽は人の見る無く、芭蕉は客に報じて聞かしむ。潤いて能く硯
滴を添え、細やかに爐薰を亂さんと欲す。竹樹は秋の半ばなるに驚
き、衾裯は夜分に愜よし。何か當に一たび傾倒して、未だ歸らざる
雲を趁い取らん。

陳與義『除夜』

城中爆竹已殘更、朔吹翻江意未平。多事鬢毛隨節換、盡情燈火向
人明。比量舊歲聊堪喜、流轉殊方又可驚。明日岳陽樓上去、島煙湖
霧看春生。

城中の爆竹已に殘更、朔吹江を翻えして意未だ平らかならず。
事多きの鬢毛は節に随つて換り、情を盡すの燈火は人に向つて明き
らかなり。舊歲に比量すれば聊か喜びに堪え、殊方に流轉しては又

た驚く可し。明日岳陽樓上に去き、島煙 湖霧 春の生ずるを看ん。

鄭剛中『寒意』

嶺南霜不結、風勁是霜時。日落晚花瘦、山空流水悲。棲鴉尋樹早、凍蟻下窗遲。季子家何在、衣單知不知。

嶺南 霜結ばず、風勁ければ是れ霜時。日落ちて晚花瘦せ、山空しくして流れ悲し。棲鴉 樹を尋ねること早し、凍蟻 窗より下ること遅し。季子 家は何こに在りや、衣單 知るや知らざるや。

陸游『五月初作』

隣舍春新麥、家人拾晚蠶。推移逢夏五、賦與歎朝三。遣日須棋局、忘饑賴酒甌。幽居有高致、多取未為貪。

隣舍 新麥を舂く、家人 晚蠶を拾う。推移して夏五に逢い、賦與して朝三を歎ず。日を遣るには棋局を須くし、饑を忘るには酒甌に頼る。幽居 高致有り、多く取るも未だ貪ならず。

陸游『夏夜不寐有賦』

急雨初過天宇濕、大星磊落纔數十。飢鶻掠簷飛磔磔、冷螢墮水光
熠熠。丈夫無成忽老大、箭羽凋零劍鋒澁。徘徊欲睡還復行、三更猶
凭欄干立。

急雨 初めて過ぎ 天宇濕おう、大星 磊落として纔かに數十。
飢えし鶻は簷を掠めて 飛ぶこと磔磔たり、冷やかなる螢は水に墮
ちて 光熠熠たり。丈夫 成る無くして忽ち老大となり、箭羽は凋
零し 劍鋒は澁なり。徘徊し睡らんと欲して 還つて復た行く、三
更猶お欄干に凭つて立つ。

徐照『和翁靈舒冬日書事三首』其一

石縫敲冰水、凌寒自煮茶。梅遲思閏月、楓遠誤春花。貧喜苗新長、
吟憐鬢已華。城中尋小屋、歲晚欲移家。

石縫 冰水を敲き、凌寒 自ら茶を煮る。梅遅くして閏月を思い、
楓遠くして春花かと誤る。貧しくして苗の新たに長ずるを喜び、吟

じて鬢びんの已すでに華あわなるを憐あわれむ。城中に小屋を尋ね、歳晚 家うつを移うつさんと欲す。

宋自遜『一室』

一室冷如冰、梅花相對清。殘年日易晚、夾雪雨難晴。身計鬺千緒、世紛棋一枰。麴生差解事、談笑破愁城。

一室冷つたき 冰の如く、梅花相あい對たいすれば清きよし。殘年 日ひ晚ゆれ易やすく、夾雪 雨あめ晴はれ難がたし。身計 鬺ま千緒、世紛 棋一枰。麴生きよじて差やや事を解し、談笑して愁城を破る。

趙與東『次韻方萬里雨夜雪意』

芋火房陰處、翛然類嬾殘。雨欺梅影瘦、風助竹聲寒。擁袂衣全薄、哦詩字欲安。兒童疑有雪、頻起穴牕看。

芋火 房陰の處、翛然しんぜんとして嬾殘らんざんに類す。雨は梅影を欺あむいて瘦せ、風は竹聲を助けて寒し。袂たもとを擁するも衣は全く薄うすく、詩を哦するも字安やすからんと欲す。兒童は雪有るかと疑い、頻しきりに起たちて穴牕

より看る。

陸游『沈園二首』

其一

城上斜陽畫角哀、沈園非復舊池臺。傷心橋下春波綠、曾是驚鴻照影來。

城上の斜陽 畫角哀し、沈園 復た舊池臺には非ず。傷心す 橋下の春波の緑なるに、曾つて是れ 驚鴻の影を照らせしこと來りき。

其二

夢斷香消四十年、沈園柳老不吹綿。此身行作稽山土、猶弔遺蹤一泫然。

夢斷え 香は消えて 四十年、沈園 柳は老いて綿を吹かず。此の身 行くゆく稽山の土と作らん、猶お遺蹤を弔うて 一たび泫然たり。

玄齋詩跋概要

唐・宋詩の名作五十余篇を取り上げ、それぞれの内容や作詩の背景及び文学の特色などについて、五言あるいは七言絶句の詩体（字数・句数・平仄の一定した定形詩）で論じたものである。

（一九八八・九・三〇 受理）

Xuanzhai Criticism in Verse of Chinese Poetry

This is the critic which I chose from more than fifty famous poems of the Tang and Sung dynasties. I reviewed the content of each verse, and the background and literary characteristics of each one, using the fixed form of verse-rhymes of the quatrains with five to seven Chinese characters in each line.